

- 3 2. 夕方になった。日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た。
- 3 3. こうして町中の者が戸口に集まって来た。
- 3 4. イエスは、さまざまの病気にかかっている多くの人をいやし、また多くの悪霊を追い出された。そして悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスをよく知っていたからである。

説教

「夕方になった。日が沈むと」イスラエルでは日没から翌日が始まります。空に星が二つ三つ輝き始めると日没ということで、次の日が始まります。この日は安息日でした。イエスさまと弟子たちは、カペナウムの会堂で礼拝し、それが終わるとペテロの家に行きます。そこで、イエスさまは熱病で寝ていたペテロの姑をいやされました。これが安息日のこの日に起こった出来事でした。

そうして「夕方」を迎えます。日が沈んで翌日を迎えるや、「人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た」のでした。ユダヤ人は安息日には仕事をしません。病気の治療も仕事に当たると考えたからか、それもしません。でも、夕方になり、日が沈んで安息日が終わるや、人々は自分の身内や友人など「病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た」のでした。彼らは、イエスさまが悪霊を追い出し、ペテロの姑をいやされたことを聞きつけたのでしょうか。あるいは、直接目撃したのかも知れません。いずれにせよ、「人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た」のでした。

こうして、カペナウムの人々が病人と悪霊憑きを次々と連れて来るため、遂には「町中の者が戸口に集まって来た」のでした。勿論、町中の人々が皆、イエスさまのいる家に入れるわけはありません。家の中は人でごった返し、家に入れない病人たちが戸口でゴチャゴチャあふれているという有様でした。安息日が終わるや、それこそ星の二つ三つを確認したらすぐさまやって来た、というところに病に悩む彼らの切実さが読み取れます。

彼らを見て、イエスさまはどうなさったのでしょうか。「イエスは、さまざまの病気にかかっている多くの人をお直しになり、また多くの悪霊を追い出された。」(34) イエスさまは、彼らをひとりひとりいやされます。ペテロの姑のような熱病だけでなく、「さまざまの病気にかかっている多くの人」をいやされます。そして、悪霊に憑かれて苦しむ多くの人から「悪霊を追い出された」のでした。助けを求める人々を、イエスさまは見捨てることなく、顧みて、彼らを助けてあげるのです。ゾロゾロと押し寄せる病人と悪霊憑きをひとりひとり助けるイエスさまの姿を思うと心打たれます。

マタイの福音書 8 章 16-17 節にもこれと同じ記事が載っていますが、そこには次のような解説がマタイによって付け加えられています。「これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。『彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。』」(マタイ 8:17) これは、マルコの福音書の記事を受けて、イエスさまのいやしのわざがイザヤ書 53 章の預言の成就であると、マタイが解釈して解説しているものです。これによると、イエスさまにはどうして人をいやす力があつたのか、あるいは、イエスさまはどのようにして人々をいやしたのかがよく理解できます。

先月、ペテロの姑の熱病をイエスさまがいやした事件を学んだ時、イエスさまは天地を創造した神であり、それ故に、人々の病をいやすことができるということをお話しました。確かにイエスさまは、天地の造り主にして、支

配者です。それ故、人の病をいやすことができになります。それは、いのちの主であるお方が、病に死に行く者にいのちを与えて生かす、ということでもあります。その意味で、イエスさまは、難なくと言うか、いのちに満ちた天地の造り主として人々を生かされました。それが、このカペナウムで多くの病人を助ける姿です。それはいわば、力に満ちた神が、力強く人々を助けるという、力強い姿です。

でも、マタイの福音書はそれとは別の面を証言します。それはイエスさまが「私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った」という事実です。イエスさまは、どうして人をいやすことができたのか、それは、イエスさまが「私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った」からです。あるいは、イエスさまはどのように人の病をいやされたのでしょうか。「私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った」ことにより、人の病をいやされました。ホイホイと簡単に人の病をいやしているように見えますが、マタイが言うように、その人々の病をご自分が「身に引き受け」たのだとしたらどうでしょうか。ご自分が「わずらい」と「病」をすべて背負うことで人々をいやされたというのなら、そんな簡単なことではありません。

マタイが引用した旧約聖書イザヤ書 53 章「私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った」の続きにはこうあります。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」(53:6) 人間たちが神を無視して自分勝手な道を歩むその咎を「彼に負わせた」というのですが、「自分勝手な道に向かって行った」について、宗教改革者カルヴァンはこううまく解説しました。「これはすなわち各々が勝手に歩んで地獄に行った、滅びに身を投じた、という意味だ。」神を無視して自分勝手に生きることの本質は、自分を神として神に反逆することに他なりません。それで、神の怒りと呪いを受けます。地獄と滅びに投げ入れられます。この神の呪いと滅び、「わずらい」と「病」を、イエスさまが「身に引き受け」「背負われ」ました。そして、「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」のです(53:5)。

イザヤ書 53 章は、来たるべき救い主が罪人の身代わりとなって神のさばきを受けることで罪人を滅びから救うという「受難の救い主」の預言です。罪人を救う救い主というので、どんなに力強い方が来るのかと思ったら、全く予想に反していました。神々しく光り輝く衣を身に纏った栄光の姿ではなく、罪に呪われ、神にさばかれて滅びる囚人、それも死刑囚の、病を患う弱々しい死にそうな病人の姿でした。それは、私たちがそうなるべき、神に呪われた姿です。そして、これが人類の救い主だったのです。十字架で神に見捨てられ呪われて死ぬ、これが救い主でした。

「イエスは、さまざまの病気にかかっている多くの人をお直しになり、また多くの悪霊を追い出された。」(34) カペナウムの町で、イエスさまは、押し寄せる多くの病人をいやし、多くの悪霊憑きを助けます。イエスさまには彼らを助ける力がありました。なぜなら、イエスさまは彼らの「わざわい」と「病」を背負われたからです。神を無視し、勝手に生きて、永遠の滅びに投げ入れられるべき私たちの身代わりとなって、イエスさまは十字架で死なれます。神に見捨てられた者の死を死なれます。罪なき方が、罪人の死を死なれました。だからこそ、イエスさまには罪人を救う力があるのです。人をいやす力があります。イエスさまは、私たちの罪と呪いを、私たちの身代わりとなって「身に引き受け」「背負っ」てくださいました。

イエスさまがひとりひとり病人をいやす姿は、病という彼らの最も切実な痛みを見て見ぬ振りせずに、それと正面から向き合って彼らを助ける、神の姿です。別の表現をすれば、それは、彼らのいのち、魂、人生に全面的に責任を負ってくださる、彼らの父としての姿です。彼らを世に生み、いつも彼らのために心砕き、彼らを生かしてくださっている彼らの父が、病める彼らを我がことのように深く憐れんで、彼らの病をいやされたのです。

イザヤ書 53 章の預言では、この方が「私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」、「私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた」、そうイザヤは連呼しました(4-5)。イエスさまが私たちの重

荷を背負い、私たちになり代わって「刺し通され」「砕かれた」、あの「病」と「痛み」と「罪」「咎」は私たちのものだった、私たちのさばきをイエスさまが受けてくださった、と言います。それは、私たちの全生涯に全責任を負ってくださる、憐れみに満ちた私たちの父の姿そのものです。

イザヤ書の別の預言では、終わりの日に「神は来て、あなたがたを救われる」とあります（イザヤ35:4）。天地を造られた神ご自身が、終わりの日には、直接、目に見える形で来られる、来て、罪に滅び行く私たち罪人を救ってくださる、と言うのです。そして、「そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。…」という預言が成就すると言うのです（5-6）。

カペナウムでのいやしが、実はまさにそれでした。神が来て、どのように人々を救ってくださるのかと思っていたら、それは人々の罪と呪いを「その身に引き受け」「背負う」ことで救ってくださる、ということでありました。彼らの生涯を担うことで、彼らを救います。すなわち、十字架の恵みで、彼らを助けてくださるのです。病める私たち罪人の全生涯に全面的に責任を負ってくださっている、私たちの父なる神の栄光を、イエスさまはカペナウムであらわされたのです。

とは言え、この後、イエスさまは翌日にはカペナウムを去って、ガリラヤ全土をめぐる旅に出られます。あたかもこれ以上はカペナウムにいる必要がないかのようにです。あるいは、イエスさまに助けを求める病人たちを見捨てるかのようにです。つまり、これで充分だったのです。これ以上、彼らに神の愛を示す必要はありませんでした。なぜなら、イエスさまが伝えたいのは、この世でのいのちではなく、永遠のいのちだからです。世と共に滅びる人の愛ではなく、永遠に滅びることのない神の愛だからです。

どんなに病気がよくなっても、やがて人は必ず死にます。病のいやしは究極のものではありません。イエスさまのいやしは、それ以上の意味を持ちます。イエスさまがカペナウムの人たちをいやしてあげたのは、病気が治ってやがて死ぬためではありません。死んでもよみがえるためです。この世のものではなく、永遠のものを彼らに教えるためです。イエスさまのいやしのわざを見る時、人々は、ただ自分の病気が治ったという御利益を喜ぶのみならず、罪と滅びから永遠に私たちを救ってくださる私たちの父の憐れみを知るべきなのです。

「その時、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく…」イエスさまがなさった病のいやしは、やがて来たるべき新天新地でいただくことになる永遠のいのちに輝く、私たち罪人の喜ばしい姿を垣間見させる、大きな希望なのです。